

特集

経営のサイエンス

経営学部 30 周年を迎えて

東京理科大学 経営学部 経営学科 教授 井出野 尚いでの たかし

1. はじめに

本学経営学部は創立 30 周年を迎えた。開設当初より、理系総合大学における数理・工学的アプローチに強い経営学部という位置づけがなされ、経営学への科学的アプローチが、今日まで貫かれる指針となっている。

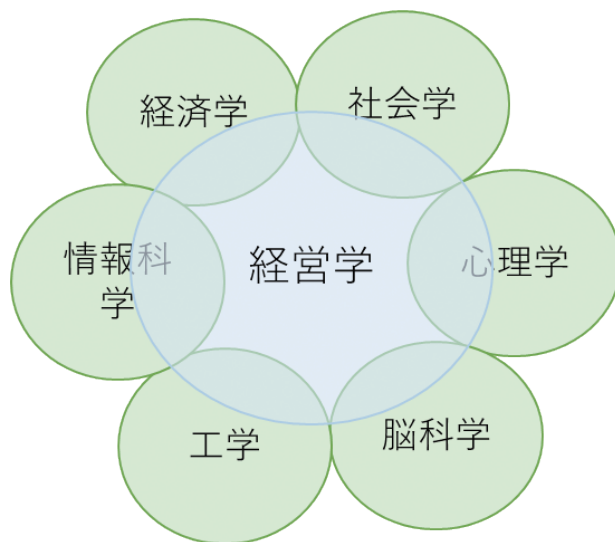
経営学は社会科学であり、企業をはじめとした様々な組織のマネジメントが中心的な課題として位置付けられてきた。組織は社会状況の変動と対峙して発展していくという性質を有する。そのため、DXをはじめとする情報技術の発展、グローバル化に伴う組織運営の変化、そして、環境問題を筆頭とする社会的な問題解決に向けた企業の取り組みの必要性など、社会環境の変化とともに経営学も学際的な色彩が色濃くなってきている。特に 2000 年代に入るとビッグデータの活用を筆頭とする情報の活用は経営の分析に必須とな

り、数理・工学的な知識が経営においても重視されてきている。学問としての経営学は、20 世紀初頭より、組織の管理という視点からの展開がみられてきたが、一方で、組織経営という場に関連する、様々な領域の研究が集積されてきている観がある【図 1】。初期より、経済学は重要な位置を占めていたが、社会学、心理学、工学なども関与し、今日では、脳科学、情報科学も関連領域となっている。

2. 東京理科大学経営学部

今日の経営学に対する社会的要請を受けて、本学経営学部の学科編成も変化を続けてきた。

1993 年、久喜キャンパスに経営学部は開設された。【図 2】に学部開設以来の学科編成の推移をしめした。経営学部は、開設当初は 1 学科体制で定員 200 人からスタートした。開設当初の理科大学報を見ると、数



【図1】経営学の広がり

学・プログラミングといった数理・工学的なカリキュラムが特徴となり、文系・理系の枠を超えた経営学の構築がビジョンとして挙げられていた。学部設立時の設備として、ワークステーション室、電算機演習室などの整備がみられ、当初より情報教育に力がそそがれていた。

また、学部開設時は、経営学科1学科体制、定員200名であったが、経営学に対する社会的需要の増加を背景に、学科編成は変化し続けている。2016年度には久喜キャンパスから、富士見キャンパスへの移転が実施され、2学科体制に移行し、ビッグデータなどを対象としたAIの技術的進歩への対応を意図し、ビジネスエコノミクス学科が創設された。2021年度には、国際デザイン経営学科を加え、3学科体制に整備が進んでいる。社会環境における問題の多様化、不確実化を背景に、デザイン思考を筆頭とした創造的問題解決が経営分野においても重視されてきた。

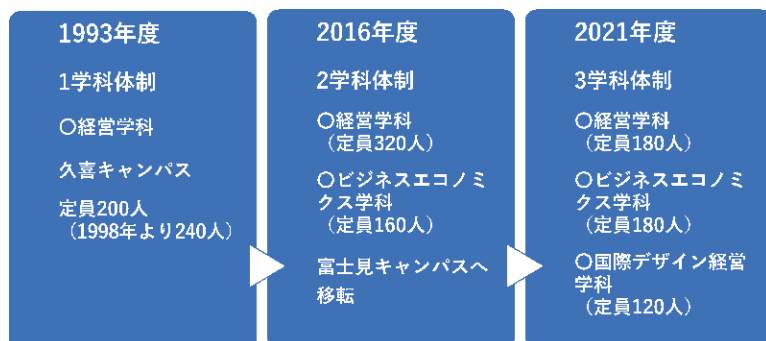
3. 特集「経営のサイエンス」

本特集は、サイエンスとしての経営学に求められる諸相について、本学経営学部の取り組みを紹介することにある。

経営学のこれからの課題と経営学部での今後の展望を椿学部長に執筆いただいた上で、経営学部3学科における研究者の取り組みを、紹介していく。椿学部長には「AI・非認知能力時代の求める新しい経営学」と題して、来るべき人間・AI共創時代において求められる経営学、そして本学経営学部の姿について執筆いただいた。国際デザイン学科からは「デザインをサイエンスする」というタイトルのもと、デザインを“よりよい未来の創出を支援する人工物を作り出す知的活動”と位置づけ、現在取り組まれている教育プログラムとその研究についてご紹介いただいた。ビジネスエコノミクス学科からは、学科の特徴であるデータサイエンスと数理工学的アプローチについて、経済学と災害復興過程、そして、情報化社会にみられる意思決定の問題への取り組みについて、ご紹介いただいた。

経営学科からは「文理融合の核としての経営学科」というタイトルのもと、社会的課題の解決と経済的価値創造に向けた文理融合という目標と、学科内の教員の研究紹介を行った。

今日の経営学は、複数の学問領域との連携が必須である。3学科に配置された教員の専門はバラエティーに富み、学内外の連携によって、総合理系大学における文理融合をリードしていくことが期待される。



【図2】東京理科大学経営学部の体制の変化